

## 「からだ」「あたま」と一体で効く

よ

大和書房 1650円 電

著者は医師である。僕は病院に行って医師の言葉を聞くのが好きである。体調が悪くて病院に行くのに、

著者は「ことば」が感性を磨き、不安を和らげる「くすり」であると言う。

本書は「死」から始まって「子ども」の話で終わる。

医師と話をしているうちに気がついたら病気が治っているという経験が何度もある。医師の言葉は僕にとっ

僕にあっては死と幼児性は一体である。幼児は死を誕生以前に経験しており、無意識にその何たるかを魂が記憶している。

では魔法である。著者が言うように「ことば」は「くすり」である。「ことば」の力が発揮される時は、「あたま」と「からだ」、そして「こころ」が三位一体になる時に「ことばのくすり」は内臓へ運ばれ、「ことば」を食事のように全身に運んでくれると言う。

僕は絵を描く時、脳から言葉を排除して、肉体を言語化する。脳の発する言葉は肉体言語に劣る。なぜなら肉体は正直である。従って魂に最も近い存在である。脳は喜怒哀楽に左右されウソも平気。肉体はウソをつくことができない。

一方、著者は礼節について想いを深めている。言葉には不思議な力が宿り、礼節は言霊を宿す。礼節は道徳でも倫理でもない。著者は芸術にも造詣が深い。と云って芸術が道徳的、倫理的である必要はない。むしろ芸術は反道徳的

そこで脳の発する言葉ではなく、肉体が発する感性としての言葉に従う方が納得できる。芸術家はそこををよく理解している。

で無礼であるべきだ。ある意味で芸術はラテン的で、その理念はいいかげんで「だいたい」「てきとう」

「ことばはくすり」である。が、薬は必ず副作用がある。言葉と行為によってカルマ(業)が発する時、「ことば」と「からだ」は

どう対応するのでしょうか。ぜひ聞いてみたいところである。

## ことばのくすり 感性を磨き、不安を和らげる33篇

稲葉 俊郎〈著〉



いなば・としろう 79年生まれ。東京大学医学部付属病院を経て軽井沢病院長。22年、山形ピエンナーレ芸術監督。

評・横尾 忠則

美術家